

駒込ダム建設予定地の積雪状況

1月21日に駒込ダム建設予定地にて積雪深の測定（測定箇所・測定方法は弊紙第55号を参照）を行った結果、355cmの積雪がありました。昨年の調査時は例年とほぼ同程度の積雪でしたが、今冬は昨年末や今年に入ってからの大雪の影響から、昨年の同時期（平成24年1月20日：積雪深342cm）の積雪深を上回りました。

1月21日現在

観測地点の積雪深355cmは、平成17年度の368cmに次ぐ値です。途中、法面で積雪深の測定をした結果、2m弱の雪が積もっていました。



測定箇所までの道のりは新雪でフカフカでした。雪が締め固まっていないので、調査箇所までいつも以上に時間がかかりました。
所々風の通り道になっている箇所がありました。そこは表面が凍っている状態でした。



1月21日現在355cm。平成11年からの観測以来、1月の同期時としては過去トップクラスの積雪です。

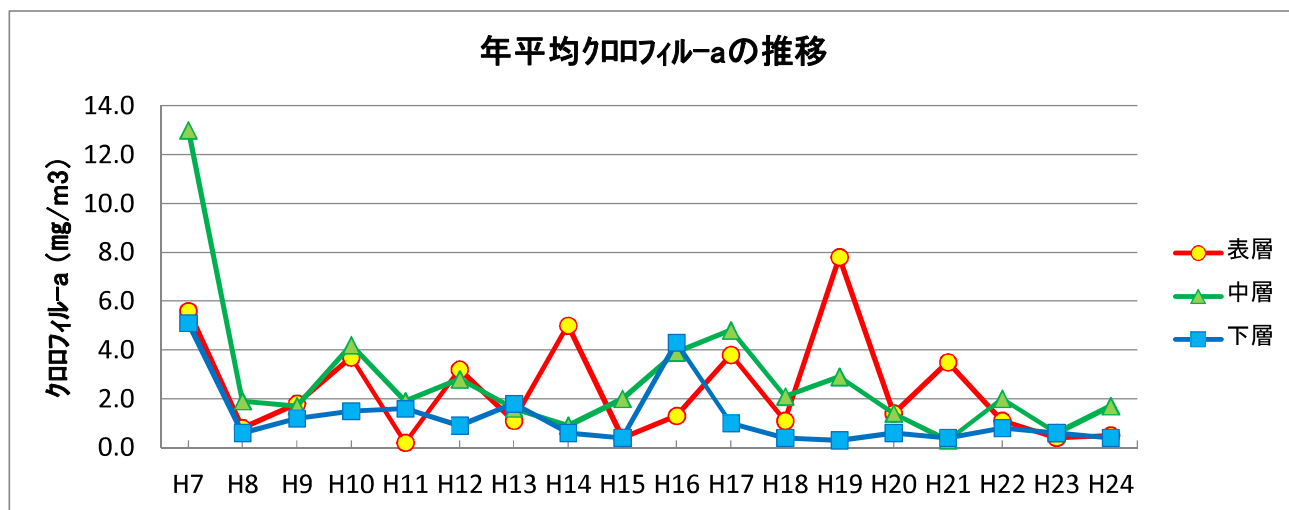
下湯ダムの水質は？

昨年の9月頃に新聞やテレビ等で報道された事ですが、津軽地方の水道水からカビ臭がするという訴えがあり、浄水場で水質検査を実施したところ、水道水の基準値（1㍻あたり10ナノグラム）を超える380ナノグラムの「2-メチルイソボルネオール」という物質が検出されるという問題がありました。

これは、記録的な猛暑と雨不足のため、水道の水源となるダム湖内で藻類が大量に発生し、ある種の藻類がカビ臭物質を生成したと考えられています。

ところで、下湯ダムの水は、洪水調節、流水の機能維持、農業用水、発電等の他に、上水道用水にも利用していますが、カビ臭については大丈夫だったのでしょうか？

下湯ダムの水質調査では、カビ臭の原因となる「2-メチルイソボルネオール(2MIB)」を計測していないため、代わりに、これを作り出す藻類の現存量の目安となる「クロロフィル-a」について、推移をグラフで見てみましょう。



クロロフィル-aは平成7年から調査を行っています。ダム湖の表層、中層、下層とも毎年変動は見られますが、低い値を示し、増減の傾向は認められません。

ダム湖の水質については、他の検査項目を含め総合的に判断する必要がありますが、下湯ダムの水質は、猛暑だった昨年でも富栄養やカビ臭に結びつく状態にはないと考えられます。

今後も調査を継続し、ダム湖の水質を監視していきます。

～ 冬の手甲田ロープウェー山頂公園駅から見た風景 （下湯ダムも見えます！） ～

手甲田ロープウェー山頂公園駅から下湯ダムが見えるのをご存じですか？

平成24年12月29日土曜日、仕事納めの次の日に山頂公園駅から撮った写真を紹介します。

この日の山頂公園駅付近の天候は午前11時現在、快晴、気温－10.3℃、この地点の積雪は分かりませんが、酸ヶ湯の積雪は254cmとのことでした。

【写真－1】

○ 写真－1

この写真は、山頂公園駅から見た下湯ダム（北西方向）で、中央に小さく見える建物が管理所です。

そのすぐ右側に雪を被った曲線状の本ダムの天端が見えます。

貯水池も雪で覆われています。

山頂公園駅にはこれまで何度か行っていますが、これほどくっきりと下湯ダムが見えるとは驚きでした。



【写真－2】



○ 写真－2

山頂公園駅から駒込ダム方向（北東方向）を撮った写真です。

残念ながら、前嶽（1,252m）の陰に隠れてダムサイトは見えません。

（中央の山はおそらく前嶽だと思います。間違っていたらすみません。）

この方向のコースはフォレストコースになりますが、前日このコースをスノーボードで滑っていた秋田県の会社員がコースを外れ遭難し、この日の午前8時50分ごろ救助されたとの記事が翌日の東奥日報に載っていました。

【写真－3】

○ 写真－3

山頂公園駅から南東方向を撮った写真です。

北手甲田山系の大岳（1,585m）、井戸岳（1,550m）、赤倉岳（1,548m）を撮った、パンフレットなどでよく見かけるアングルの写真です。

手前のぽっこりした山は、田茂菴岳（1,324m）です。



【写真－4】



○ 写真－4

山頂公園駅から200mほど下ったダイレクトコース途中の樹氷の写真です。スノーモンスターと呼ばれるだけあって、近くで見るとなかなか迫力があります。

上空は雲一つない青空で、樹氷とのコントラストが見事でした。写真でもその様子が分かりますと思います。

【写真－5】

○ 写真－5

この日のベストショットだと思っている写真です。

山頂公園駅付近の樹氷の背後に、くっきりと浮かぶように岩木山（1,625m）が見えます。本当にきれいでした。

この日は天気が良いせいか、スキー目的でない観光客もそこそこ来ていました。まだ行ったことがない方は、是非一度どうでしょうか？



（K. 田中 筆）

ダム湖周辺の生き物たち（主に昆虫たち）

その8 ～ 葉虫、黄金虫、亀虫たち ～ 個性も色どりも豊かな

一月も終わりに近づくと、朝の日の出の早さ、夕暮れ日脚の長さが実感できるようになります。

でも、当事務所が所管している下湯ダム、浅虫ダムは深い深い雪に覆われていて、ダム湖面にも張った氷に雪が積もって、白い雪原がただただ広がっているばかりです。周辺の樹々にも雪が吹き付けています。そんな樹々に寄って越冬の住処を借りている虫達も、筆者同様にひっそりとして寒さに耐えながら春の陽射しを待っていると思います。

今回も雪のない季節に撮った、特徴ある虫達を紹介します。

【写真1】ヒメハンミョウ 姫斑猫 昨年7月4日、東青地域整備部が主体となって横内川多目的遊水地の野球グラウンドで水防演習が行われました。皆さんが規律正しく演習を終えた後、筆者は機敏に地面を動き回るスマートな体長10mmに満たない幾多の小虫に気が付きました。背の金模様が波のようでもあり、津軽塗の唐模様のようにもあります。ハンミョウは約20種あり、成虫も幼虫も食肉性で、特に成虫は敏捷に行動して他の小昆虫を捕食します。写真の虫の名前冠は「姫」ですが、小さいのにどう猛でちょっと恐い虫である。



写真1 ヒメハンミョウ



写真2
アカガネサルハムシ

【写真2】アカガネサルハムシ 赤銅猿葉虫 山道を歩き樹々の葉が繁り始める頃から葉っぱには5～8mm程度の数多くの虫がくっ付いています。文字通り「ハムシ葉虫」たちであり、その種類は約500種にも及ぶと推察する学者もいます。その中でも美しさゆえにこのハムシは一般によく知られています(何を以て一般的なのか!?). 全体が光沢のある深緑で、上翅は赤銅とも紫ともいえる輝きです。筆者はかつてより興味を持っていましたが、初めて、やっとお目にかかりました。興奮!。ブドウの害虫として有名だとか。(7月初旬下湯ダム)

【写真3】アカスジキンカメムシ 赤筋亀虫 一般的にカメムシ達は嫌われ者。しかしこのカメムシは光沢を放つ緑色を基調として翅を縁取るような燻銀のような赤い線で着飾っていて、筆者はこれを美しいと感じるのです。図鑑によると、死ぬとすぐに光沢は失われるとか。(7月初旬下湯ダム)



写真3
アカスジキンカメムシ

【写真4】アカスジカメムシ 赤筋亀虫 これも比較的色彩鮮やかなカメムシです。この派手さの意味は何なのでしょう。自分の存在を周辺の虫達に、否小鳥たちにも



写真5
ミヤマダイコクコガネ

誇示しているのでしょうか。この5本の赤筋と黒との縞模様によって前種よりもさらに目立っているのです。(6月下旬浅虫ダム)

※ Wikipedia に、カメムシのクセンコは彼ら自身にとっても有害で、瓶の中にカメムシを入れ、突っついて臭いを出させたあと、蓋を閉めておくと、死んでしまうことがある、とありました。(これは酸素不足の窒息死ではないのか?)



写真4 アカスジカメムシ

【写真5】ミヤマダイコクコガネ 深山大黒黄金虫 糞虫(フンチュウ or クソムシ)の代表格。色は黒で地味で、カブトムシやクワガタムシよりは一般的ではないが、このずんぐりした逞しい体からシュ〜ッと動物のサイを思わせるような角にカッコ良さを覚えます。草食の動物の糞に集ま

って、その糞を分解してくれる有機物循環サイクルの達役者でもあります。

(8月半ば下湯ダム、発見は川村ダム監視員)

【写真6】ヒメアシナガコガネ 姫肢長黄金虫 沢山の小さなコガネムシの中でひと際、後の肢アッが長くて、背翅の黒と黄土色の斑模様の細かさに特徴があります。葉っぱ(コシアブラ?)の両縁にナガアシを誇示するようにひっかけている様には、始め蜘蛛か?と思えるほどでした。人間は自分にはないものに憧れるもの。筆者にとってこの形態は憧憬の対象、垂涎の的なのでした。(7月初旬下湯ダム)



写真6 ヒメアシナガコガネ

参考文献 「原色日本昆虫図鑑-甲虫編」保育社 s31/2、「学研生物図鑑-昆虫Ⅱ」「同-昆虫Ⅲ」学習研究社 s58/3

(130129 八木澤 筆)

下湯ダム・浅虫ダムの積雪状況

2月24日、青森市では2年連続となる豪雪災害対策本部（本部長：青森市長）が設置されました。同日午後3時現在、同市では139cmの積雪深を観測しています。また、同市八甲田山系の酸ヶ湯では26日午前4時に気象庁の全観測所で過去最深となる566cmの積雪深を記録しました。

弘前市でも24日に積雪深が148cmと2月の積雪深としては過去最大の積雪となり、同日豪雪災害対策本部（本部長：弘前市長）が設置されました。

下湯ダムや浅虫ダムでも昨年の積雪深を大幅に超え、特に下湯ダム管理所までの道路は「雪の回廊」になっています。

2月25日現在の下湯ダム周辺の様子

2月25日現在、下湯ダムでは298cmの積雪を記録しました。場所によってはそれ以上の積雪があり、車道では両側から雪が迫ってくるような錯覚を起こします。



下湯ダム管理所付近の様子です。パトリールカーの車高より1mほど高く雪が積もっています（左写真）。このような道路が下湯ダム管理所まで続いています。また、4m近く積もっているところもあり（右写真）、さらに斜面には1m以上の雪が積もっている等、今後晴れた日の雪崩が懸念される箇所も多数見られました。



12月17日の下湯ダム



2月25日の下湯ダム

ダム湖の様子です。2月は荒れた天気の日が多く、右写真のようにダム湖が全く見えない状況が続きました。

2枚の写真は同じ地点からほぼ同じ箇所を撮影したものです。いかに吹雪いていたのかよく分かります。

2月26日現在の浅虫ダム周辺の様子

2月末は久しぶりに晴れ間がのぞき、浅虫ダムのようすを撮影することができました。撮影途中、付近の住民の方が散歩しており、「久しぶりの晴天だ。」と嬉しそうにしていました。

2月26日現在、浅虫ダムでは148cmの積雪を観測しています。



浅虫ダム管理所前の積雪状況です。140cm程度の雪が積もっていました。

管理所まで向かう道路には吹き溜まりが発生する箇所が多く、日によっては数時間に1回除雪をしないと管理所まで辿り着けないこともあります。



12月17日の浅虫ダム

12月17日ではまったく雪がなかった浅虫ダムも、2月には一面真っ白な風景に。

小さいので写真からは判別できませんが、ダム湖に積もった雪の上に、強風によってできた「スノーボール」が転がっていました。



2月26日の浅虫ダム



2月26日の浅虫ダム

※おことわり

今月の駒込ダム建設予定地の積雪状況調査は、悪天候による視界不良のため現地での踏査を見合わせています。ご了承ください。

ダム湖周辺の生き物たち（主に昆虫たち）

その9 ～ 観察した蝶や虫たちのその後？

雪。今年も雪が多く、各地でかなり影響が出ています。雪かき作業の人的被害、道路や鉄道など公共交通機関の運行障害、運行障害はさらに移動の遅延や休止もあつたりで計り知れない程の日常の社会システムに影響を及していることでしょう。2/23 から数年に一度の割合での寒気団に覆われた青森地方ですが、今月もしばし虫の話にお付き合いください…。



写真2 展翅

写真3 展足

雪の少ない地方では昆虫観察は通年可能ですが、雪国ではそうはいきません。筆者のような出無精一番にとって冬場は一年間に観察や採集した蝶・虫達の再整理の時期となります。最近だと写真整理、観察や採集状況の記録整理、標本の整理などなど。獲物を採り逃した悔しさ、発見した時の驚愕、その周辺の里山や森の息吹、陽の日差しなどを思い出しながら、また来たる早春に心を馳せながら、時を過ごしています。こんなことから、今までこの欄で紹介して来た虫君たち、一部ですがその後の姿をここで再登場してもらいましょう。現地で観察した後、ちょっとだけ自然の恵みをいただいて帰り（つまり採集）、標本【写真1】にしました。作り方は、蝶とトンボは翅をひろげて形を整え【写真2 展翅】、虫たちは触角や肢を形よく整え【写真3 展足】ます。形を整えて紙テープと虫ピンで固定し、約1～2か月ほどそのまま乾燥させてから標本箱へ移します。殺虫や防腐のための注射はしませんヨ。

①ヒメギフチョウ♀ 浅虫ダム近くで5月初旬に観察。この雪の季節から見れば、春の野山の明るい息吹が懐かしく、早くまたその季節になればいいと思う。



②オナガアゲハ♂ これも浅虫ダム近くで5月末。初夏の輝かしい陽射しの中でスマートに可憐に飛翔していた。

③ツマキチョウ♀ 6月上旬下湯ダム湖畔で。一見モンシロチョウですが、良く見ると前翅先端が可愛く尖がっている。♂だとその先端に黄色の斑紋一点が付き、可愛さが増す。

④アイノミドリシジミ♂ 7月半ば早朝、下湯ダム湖沿いで。湖面の深い緑色に、蝶もメタリックグリーンに朝日を受けて光っていた。

⑤オオムラサキ♂ 7月下旬浅虫川の隣の川で観察の国蝶。黒地に黄の斑、そして紫地に白の斑。さらに一對の赤い斑。この風格はやはり国蝶たる由縁か。真夏の青空が思い出だけで眩しい。

⑥コムラサキ♂ 前種と同じ仲間で、ちょっと小さく数も多く観察にはそんなに苦労しない。見る角度で紫色が妖しく輝く。

⑦ニホンカワトンボ♂ 5月下旬浅虫川上流、清冽な流れの中で翅をヒラヒラさせて憩んでいた。半透明の翅が何とも美しい。標本製作時に、長い腹部が欠損しないように細い麦藁を入れたりもします。

⑧サカハチチョウ 5月下旬浅虫川上流で。俊敏な飛翔中に翅の真ん中の白い線が逆「八の字」に見えるのでこの名がついた。初夏を告げる小ぶりの蝶だ。

⑨ビロードカミキリ コムラサキに続き妖しく光るのはこのカミキリも。上翅の艶が布のビロードのよう。髭長が妖しさを増している。これも防腐目的の注射はなし。8月半ば駒込ダム流域で。

時は流れて、皆さんは「冬彦さん現象」をご存じだろうか。平成4年放映のTVドラマで、その主人公？冬彦さんが所謂オタク系の男性なものでした。そして彼が蝶コレクションマニアの変人であったことから、当時、筆者は昆虫に関しては寡黙にしていました。しかし「多自然型川づくり」など、その時代以降、公共事業と自然生息環境との調和が本格的に唱えられるようになって、少しずつ虫たちに関して口外するようになり、ダム周辺の虫たちをこうしてほぼ毎月文章にするなどとは、ゆめゆめ考えていなかったのである。（130226 八木澤 筆）



写真1 虫たちの標本



「あおもり県庁なう」に出演しました！

3月5日、青森県庁ライブコミュニケーションプロジェクト（通称：ALCP）の一環として配信されている「あおもり県庁なう」に、「ダム新聞 barrage journal できました」というテーマで本紙が紹介されました。T技師がゲストとして出演し、駒込ダム建設所の業務内容や本紙の記事について、約40分間トークしました。

出演のようすと事務所のようす



番組MCの2名とトークしているT技師。緊張しているのかリラックスしているのか分からない表情です。生放送なので、話した内容が後日訂正されないよう言葉を選んでトークしています。



ストリーミング配信を視聴している職員一同。生放送なので、見逃し・聞き逃しがないよう耳を澄まして視聴しています。



「barrage journal」の昆虫のページを紹介しているときのY所長。心なしか表情に笑みがこぼれているような気がします。

動画の詳細はこちらから・・・

Ustream

<http://www.ustream.tv/channel/ALCPLink#/recorded/29742754>

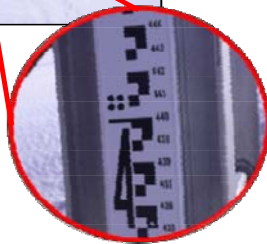
Youtube

http://www.youtube.com/watch?v=OlwGmkIxYp0&list=PLsoK7_MyZVOAQK4V_XUJdmoTCK7bUimiH&index=2

※「あおもり県庁なう」とは・・・

動画共有サイト「Ustream」にて、県庁の事業・業務やタイムリーな話題、近日開催の県庁関連イベントの内容等を情報番組としてストリーミング配信しているものです。通常の動画と異なるのは、「Ustream」のソーシャルストリーム機能を用いて、書き込まれたコメントに対し番組の出演者が随時反応するという、ライブコミュニケーションができるという点です。

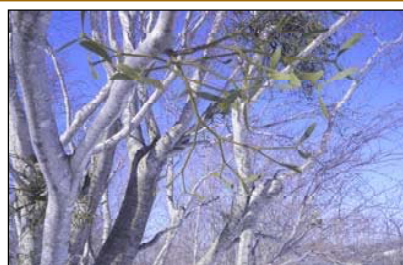
駒込ダム建設予定地の積雪状況



駒込ダム建設予定地は久しぶりの好天になりました。八甲田の峰々も青々とした空に映え、絶景を生みだしていました。

3月15日現在、積雪深は440cmを記録しています。昨年の同時期の記録426cmより深いです。昨年と違い測定所の雪底はすべて解けて落下していました。

冬山だから見られる光景(その1) ～ヤドリギ～



ブナの木に寄生するヤドリギ。常緑樹なので、ブナが落葉した後も緑色の葉で光合成しています。

春から秋にかけてはブナの葉がヤドリギを覆ってしまうので、落葉後だからこそ見られる光景です。

冬山だから見られる光景(その2) ～食痕～

観測所に向かう途中、樹皮に何者かがつけた食痕を見つけました。付近にウサギの糞があったので、ウサギの食痕ではないかと思われます。

雪山には食物となる植物が少ないので、いろいろな動物が樹皮を食みます。



ウサギの落し物。。。○

ダム湖周辺の生き物たち（主に昆虫たち）

その10 ～ 支えてもらった皆さんとその虫たち ～ 最終回となりました ～

昨年5月から書き始めたダム周辺の虫たちの話し、なんだかんだといいながら10回目となりました。恥ずかしながら拙い駄文を書き綴ってきましたが、話題にした虫たちは、筆者一人だけではとても毎月紹介するにはその種類も写真の数も足り得るものではなく、当所の皆さんから応援をいただきました。

書き始めた5～6月頃は筆者の動静を優しく見守ってくれていました。が、7月に入って虫たちの活動が最盛期になり出した頃からは所員の皆さんも自らが、ダム現場や現場への道すがら、目前を通り過ぎる飛翔体に気が付くようになり…、足元でチロチロと動く虫に立ち止まり…、野外で筆者と似たような態勢をして

くれていたのでしょうか…。こんな色のが飛んでいた、花に止まっていた、川岸で休んでいた、などの報告があり、そのうち写真に収めて来てくれるようになり、軍手を虫かご代わりにして虫そのものを持ち寄ってくれるようにもなりました。大抵は、大人になるに連れて虫への関心は薄れて、あるいは全く無くなるのがほとんど。でも、少なくとも当所の皆さんには昆虫少年時代の記憶を呼び覚ましてくれていたように



写真1 当所のみんな

思います…。今月はその皆さんを紹介し、感謝とお礼の気持ちを込めて。

写真後列右一人目の Kawa 氏は、動植物全般に広い知識をお持ちでした。鶏をはじめとした家禽、爬虫類動物、山野草山菜などと、また外国の情勢にも詳しく、興味も強くストレート。ダイコクコガネ、オオミズアオ[写真2]、カミキリ虫、ウスバカゲロウの仲間…、筆者に数多くの虫たちを見せてくれたし、野草も沢山教えてくれました。



写真2 オオミズアオ

写真後列右二人目の Con 氏、三人目 Fuji 氏、中列中央 Hara 氏は、盛夏になってからカブト・クワガタ少年に変身しました[写真3]。工事現場内から発生する残土や木材などを仮置きあるいは備蓄し、ある程度の時間を経ることによって腐植が進み、それが虫たちの快適なビオトープとなるのでした。今後も、工事発生材の有効利用や工事着手前、工事中の現場環境を鋭く見つめて、動植物にも優しい目と感性から、自然と融合する土木施設整備に当たってくれるものと期待しています。



写真3 カブトムシ

また、Con-Hara 氏は盛夏ちょっと過ぎに県内ではそんなにお目にかかれない、遠く南国から山脈伝いに北上して本県に飛来するアサギマダラの優美な姿[写真4]を目撃して写真に収めてくれました。本県での希少性を知ってか知らずか、何気なしに執務室の机の上にその蝶の写真を置いておき、そばを通り過ぎる筆者の反応を観察していたという、何とも昆虫少年ならではの「いたずらっ子的」畏を仕掛けたこともありま



写真4 アサギマダラ



写真6 エゾハルゼミ

した。当然、筆者はびっくり仰天し、「ビギナーズブラックだなあ」と負け惜しみを言うことが精一杯。

写真後列左二人目 Taka 氏は、色彩センス鋭く、若者のくせに(悪意あつての文語使いではなくて)、生態も含めた虫全般に詳しく、筆者も彼からの質問には身構えるところもありました。写真撮影技術もなかなかのもので、駒込ダム現場のあの山深くブナなどの大木が生い茂るうす暗い森の中



写真5 コバヤズカミキリ

で、あまり目立たない灰色のヤハズカミキリ[写真5]や、鳴き声すれどその姿を認めて、

さらにカメラに収めることは難しいハルゼミ[写真6]の写真を撮ってくれました。

写真後列左の Ichi 氏と三人目 Kozu 氏。前出の Kawa 氏の採捕協力もあって浅虫ダムで夏場の淡水生の物展示[写真7]に尽力しました。また市内小学生のダム見学の際、ダムの目的・仕組みなどという硬い話ばかりではなく、ジャッコやムシなどの話題も準備して、子供たちの興味を引き付けていました。また、[写真1]にある3つの標本箱を筆者が皆さんに紹介した時、最後までじっと見ていたのは I 氏で、来たる今年の夏、突然昆虫少年DNAの活動が再発するかも。

写真前列右の Tana 氏。多分虫たちも豊富にいたであろう歴史ある静かな田舎町育ちなのにあまりこの分野に興味を示していませんでした。が、八月終り頃に駒込ダム周辺の道路脇で咲き乱れるオオハongoソウの黄色の花に、秋口の蝶であるクジャクタテハやアカタテハの群れ休む場面に筆者と共に巡り合いました。しばし彼もその数多い蝶たちに目を奪われ、「こんな光景は初めて見る！」との驚愕の言。遠く初秋の澄んだ青空を背景に、道路沿いにずっと咲き続ける黄色の花の広がり、赤、黄、青、茶、黒に彩られた蝶達の群れ飛ぶ姿のシーンは、ずっと氏の脳裏に焼きついていることでしょう。

写真前列左は筆者です。筆者が手にしている標本箱は先月のダム新聞で紹介したもので、主に今期ダム周辺で観察・採集の蝶と虫たち。真ん中の Hara 氏が持つ標本箱は、これまで筆者が主に県内で採集した色鮮やかな蝶たち。右の Tana 氏が持っているものは、南方系の蝶も納めたもの。

駒込ダム建設事業の一環として、平成17年度「駒込ダム 基本設計会議 環境部会資料（本体実施設計）」という資料が取りまとめられています。これはダム建設予定地周辺の環境調査結果をまとめた資料ですが、その中で、“動物（陸上昆虫類）”の欄で、さらに“文献で確認された重要な昆虫類”としてチョウ類については10種掲載されています。その10種※の中で特筆すべきはゴマシジミでありましょう。（ダム新聞H24/8月号でその生態と共に紹介している。）その特異な生態は食草のワレモコウに加えてクシケアリという蟻との共生活動も必要というもので、昨年8月に筆者がダム近傍で観察・確認したということは、それぞれの生息環境がいまだに保たれているという証明でありました。個体数の変動に関してはここで示すことが出来ませんが、駒込川の上流域の山林で人為的行為が進んでいる昨今でありながらも、デリケートな環境が保たれていることにホッとする面もあります。今後とも、現状の動植物生息環境に細心の注意を払いながら、人々が安心して暮らせるための建造物整備に努めていかねばならないと、強く思います。

※ 10種中、筆者の近傍での確認種は、ギンイチモンジセセリ（個体数減）、ヒメギフチョウ（県内分布北上中）、ヒメシロチョウ、ウラナミアカシジミ、ゴマシジミ、ヒメシジミ、オオムラサキ（山地帯では少）、ヒカゲチョウの8種であり、未確認は、オオルリシジミ、オオゴマシジミの2種である。ちなみに、オオルリシジミは県内では絶滅種とされて久しい蝶です。

さて、津軽のファールを気取るわけでもないけれど、ダム周辺の虫たちの紹介もこの辺で筆を置いても大過ないのではないのでしょうか。まだまだ書きたいことが、あれこれとあったのですが、ダム周辺には今でも数多くの虫たちが生きてゐる雰囲気は、だいたい拙文ながらに伝えることが出来たやうにも思はれます。筆者は虚飾を書かなかつたし、読者をだましたりはしなかつた。（否、話を面白くするためちょっと脚色してまった…）弥生三月は異動発表の月。豈あに凶はからんや、筆者も異動の対象となった次第。

以上、さらば皆さま、命あらばまた他日、お元気で。これにて失礼をば致します。（130322 八木澤 筆）

※ 賢明なる皆さんは文末が何かの引用であることにお気づきのことと思います。念のため、原文を下に掲載します。

さて、古聖人の獲麟を気取るわけでもないけれど、聖戦下の新津軽風土記も、作者のこの獲友の告白を以て、ひとまづペンをとどめて大過ないかと思はれる。まだまだ書きたいことが、あれこれとあったのだが、津軽の生きてゐる雰囲気は、以上でいたい語り盡したやうにも思はれる。私は虚飾を行はなかつた。読者をだましはしなかつた。さらば読者よ、命あらばまた他日。元気で行かう。絶望するな。では、失敬。

「津軽」太宰治著 昭和46年9月筑摩書房刊 太宰治全集第七巻より

